

氏名	坂本 道子 (学籍番号 17DS03)		
学位の種類	博士 (社会福祉学)		
学位記番号	4号		
学位授与年月日	2020年3月12日		
論文題目	あるディアコニッセの福祉実践とその思想		
論文審査担当者	委員長	野田 由佳里	教授
	委員	大友 信勝	教授
	委員	藤田 美枝子	教授
	委員	横尾 恵美子	教授
	委員	川村 佐和子	教授

論文要旨

1. 目的と方法

本論文は、キリスト教社会事業史の中で、人物史研究に位置づけられる基礎研究の1つである。日本キリスト教社会福祉学会では1960年の設立当初から、クリスチャン・ソーシャルワーカーの実践の「基軸」やその背景となる思想について議論し、「信仰のパントマイム」¹として「塵の中を歩いてディアコニア」を具現化することをめざしてきた。しかし、その具体的な実践内容についてはほとんど研究されてこなかった。そこで、本論文では「ディアコニッセ (奉仕女)」である天羽道子 (1926年～、以下「天羽」と略す) の福祉実践とその背後にある思想を明らかにすることを目的とした。「ディアコニッセ」とはプロテスタントの献身女性である。天羽は現存する日本人ディアコニッセ13名のうちの一人である。1954年「社会福祉法人ベテスタ奉仕女母の家」設立前からディアコニッセを志願し、当時着衣式を受けた4名のなかで、現在もディアコニッセとして存在するただ一人である。用いる資料は機関誌『ディアコニア』を中心に、活字で出版されているものである。すでに公表されているものを使用するという意味で、本論では実名で表記した。

2. 全体構成と概要

本論文は大きく3部構成である。第I部は序論「キリスト教社会福祉におけるディアコニッセ福祉実践研究の意義とその活動史」と題し、序論第1章；研究の背景と目的、序論第2章；ディアコニッセの歴史として述べた。

第II部は本論「福祉実践者としての天羽道子の人物史」と題して、本論第1章から本論第6章において、天羽の福祉実践を機関誌によって明らかにした。構成は次のとおりである。本論第1章；生い立ちと福祉実践への思いー「何かをしなければ」、本論第2章；ディアコニッセとして先駆的活動に参画するー「な

¹ 阿部志郎 1967「基督教界に占める社会事業の役割」日本キリスト教社会福祉学会 2009『日本キリスト教社会福祉学会 50年史』p. 143-p. 148

すべきことを為す」、本論第3章；婦人保護施設での従事者として女性の自立生活を支える－「させてください」、本論第4章；婦人保護施設長として「村人」の生活を守る－「共に生きます」、本論第5章；理事長として「村人」と共に生活する－「お伝えします」、本論第6章；名誉村長として象徴的役割を担う。

第Ⅲ部結論では「天羽道子の実践と思想」と題し、結論第1章；天羽道子の福祉実践、結論第2章；天羽道子の福祉実践を裏付ける思想、結論第3章；研究の評価と課題、を述べた。

3、結論および研究の評価と課題

ディアコニッセ天羽道子の福祉実践と思想を明らかにすることを通し、キリスト教社会福祉学会が求めて来たクリスチャン・ソーシャルワーカーの「ディアコニア」を具現化する実践の一事例を示すことができた。天羽の福祉実践は、幼少期からその土台が形成された「同じ人間」という思想と、キリスト教に触れ、深津文雄牧師から受け継いだ「底点志向」という思想を併せ持って、「一人一人価値ある存在である人間を、同じ人間として信じぬく」という、天羽独自の自律的かつ自立的な根底思想を形成したと言える。この思想は乳児院や保育園、婦人保護施設、長期婦人保護施設などの福祉実践を通し、「何かをしなければ」「なすべきことを為す」「させてください」「共に生きます」「お伝えします」という福祉実践を表す思想が積み重なった結果であった。これらの日々の実践の積み重ねがあったからこそ、施設長、理事長、名誉村長という役職を経た。これらの役職に就くことは彼女自身が望んだことではなく、与えられた仕事をただ謙虚に忠実に重ねてきた結果であった。

今後の研究課題として、次の5点があげられる。第1に、キリスト教社会福祉がめざす信仰と福祉の関係性を明らかにすることである。「ディアコニッセ天羽道子」が行った福祉実践がキリスト教社会福祉の実践として、どのように位置づけられるのか、信仰と福祉実践とのかかわりは何か等の検証である。

第2に、天羽の福祉実践と時代や社会との関りの検証である。時代や社会のなかで、法人組織および天羽がどのような位置づけで、先駆的な役割を果たし、その後の時代や社会へどのような影響を与えたかについての検証である。

第3は、ディアコニッセ天羽の信仰や宗教と福祉のかかわりにおける分析と考察である。今回は天羽の「福祉実践」に注目した論文であるゆえ、天羽の信仰や宗教のかかわりについては論点にしなかった。天羽が「目の前」の人に対してどのような福祉実践をしたのか、その言動に着目したにとどまった。それでも、その実践の中に信仰や宗教色が見え隠れしたのは否めない。今後は、逆に信仰や宗教の側面から天羽の実践を分析し、そこに見え隠れする「福祉実践」についての考察が必要である。

第4に、本論文は社会事業史研究の中の基礎研究である人物史研究に位置づけられる。その中で、いままでも人物史研究として表されているいくつかの人物史研究との比較も研究課題として残った。男性人物史研究が多い中で、女性の社会福祉従事者の人物史研究をさらに積み重ね、女性社会福祉従事者としての特性や特徴を浮き彫りにさせる必要もある。

最後に、名を成し、功を遂げた著名な人物の人物史を検証するだけでなく、福祉の実践現場で名もなく功も成し遂げない多くの無名の従事者の人物史研究を、今後も数多く研究することが課題として挙げられる。それらの無名の従事者の実践内容や思想を明らかにしていくことも今後の課題として残った。

論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、文献によって人物史として分析することを通して、福祉事業の内容とその背後にある思想を明らかにすることを目的としている。研究対象として、日本において、おもに婦人保護分野に従事した、一人のプロテスタントの献身者「ディアコニッセ（奉仕女）」である天羽道子氏に注目し、キリスト教社会事業史研究の一つとして、各時期の実践を役割に着目し体系的に丹念に分析することを通して、福祉事業の内容とその背後にある思想を明らかにし人物史としてまとめ上げ、目的を達成している。

以下に本研究の評価できる点について述べる。

1. テーマ、目的、方法にオリジナリティがあり、序論と結論に一貫性がある。まとまっている。
2. 研究方法としては、半世紀に渡る天羽の”語り”を丹念に分析する形式をとり、役割に着眼しながらも宗教家かつ福祉実践家として成熟していく様を、時間軸の中で体系的にまとめ上げられている。
3. キリスト教社会福祉学会が直面してきた課題である「生涯かけて挺身した足跡を辿る」「無名の実践を発掘する」この両面に向き合った挑戦的な研究と言え、今後、キリスト教社会福祉学会の基礎研究にもなり得る。
4. 序論から始まる丹念な文献狩猟は、底点志向などキリスト教者にある思想をどう社会福祉養成教育に取り入れて発展させていくかなど、著者の今後にも大いに期待を寄せるものである。

以上のことから、本論文が著者に博士（社会福祉学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めると審査委員会として合意した。